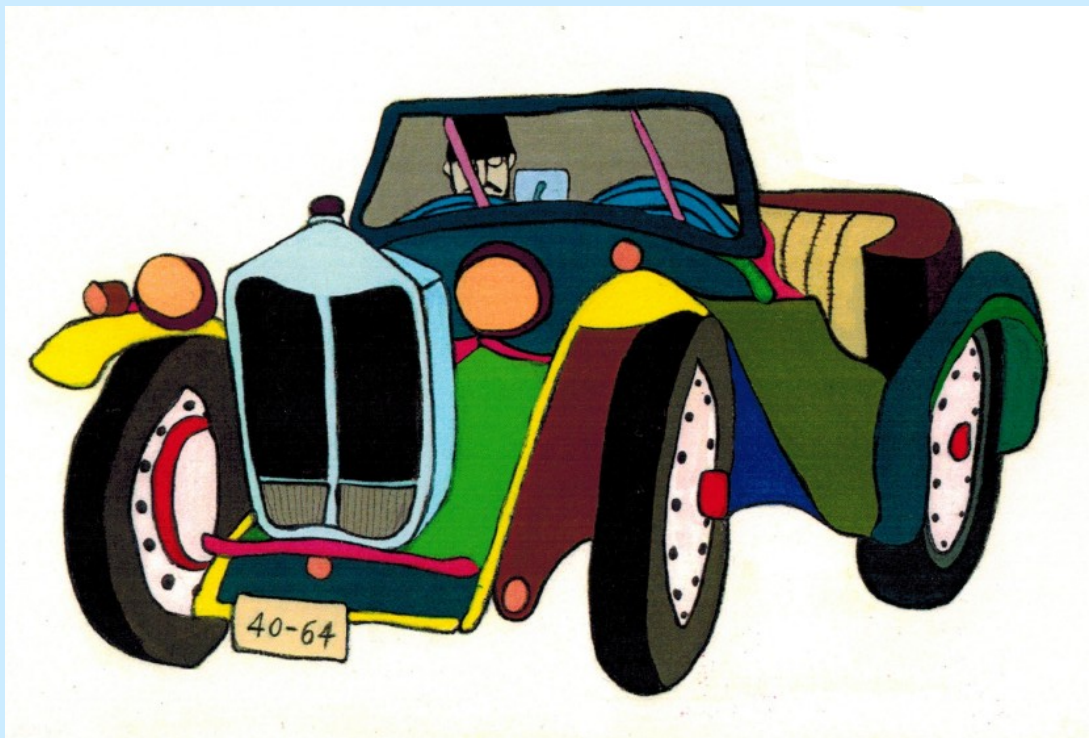


めんたるねっと

VOL.19-1

No. 73

総会研修会報告	災害後の中長期支援から見えてきたもの～みやぎ心のケアセンター	2
SST の現場から	東京 SST クラブ講座～PDI ガイド関係発達支援から学ぶこと	4
書籍紹介	絵本「わすれられないおくりもの」スーザン・バーレイ	5
活動報告	「子どもとみんなの食堂」を試みて～月1回の開催継続へ	6
	駄菓子屋カフェ～七夕の願い／ジョブコーチ～コロナ禍の工夫	8
	プレジョブスクール～畑から食を／Irodori～活動時間の拡大で	9
	事務局より／予定・報告	10



絵：八木 陽子

「災害後の中長期支援から見えてきたもの」～外部支援・子どもへの支援

～みやぎ心のケアセンター地域支援部次長兼基幹センター地域支援課長 片柳光昭氏の講演から～

はじめに

今回の講師である片柳光昭氏は、みやぎ心のケアセンターに10年間勤務され、現在は現場を離れまとめの仕事にとりかかっているとのこと。これまでの実践をオンラインで総会后の時間にお話しいただいた。主な内容を以下に紹介したい。

1 みやぎ心のケアセンターについて

みやぎ心のケアセンター（以下コケセンと略す）は東日本大震災後に設置された組織で、県内に3つのセンター（気仙沼地域センター・石巻地域センター・基幹センター）を拠点としてそれぞれの地域で支援を実施する期限付きの組織である。当初令和2年度までの活動期間は令和7年度まで延長となった。片柳氏は気仙沼市、南三陸町をエリアとする気仙沼地域センターで長く仕事をされてきた。気仙沼地域センターでは、地域のすべての住民が支援の対象になっている。主な活動は、個別支援と普及啓発活動。支援者支援として、市町職員や社協職員の支援を実施。また、市町の関係各課、保健所などと連携した取り組みを行う。コケセンからは気仙沼市に1名、南三陸町に1名、合計2名が週4日派遣されている。

2 支援者を取り巻く被災地の現状

片柳氏が業務に携わって間もない頃の、「住民からの相談件数・震災関連の相談内容は時間とともに少なくなり、支援者の負担や疲労は時間とともに軽減するのではないか」という予測はずれた。震災から10年経過後も相談件数は増加している。復興期間が終了すると復興に関する財源は大きく削減され、人材は減り、残された膨大な業務量、を元々の地元の職員数で行うという今までにない困難な状況になった。そして、「震災前に戻る」どころか震災前、震災発生時、そして震災から10年が経過した現在、地域が抱える課題（精神保健分野に限らず）は常に変化している。

3 外部から、長期の支援を通じて

片柳氏がコケセンの2代目の課長として気仙沼地域

センターで仕事を開始した時、コケセンが地域に受け入れてもらえていない状況にあった。それはしばらく続いた。外部に対する問題としてスタッフの思いと地域の思いの違い、内部に対する問題として組織マネジメント（上下・課内）の不十分さがあった。支援がダメージを与えるという事実、受援によりダメージが生まれるという事実が生じていたのである。外から後からの支援者は状況を客観的に捉えやすく、冷静で心身のエネルギーが高い心の状態、支援の期間が決まっておりに地元に戻ることができる。初めからの支援者は局所的にしかわからない、既に疲労困憊しており、そこで生きていかなければならない。支援者の前に地域住民の一人がかつ被災者である人も少なくない。

また外から後からの支援者は経過がわからずできていないことを指摘したり、初めからの支援者が分かってもできないことに「もっとこうした方がいいですよ」と言ったりする。さらに「何をしたらいいんですか？早く指示をください」と言い、初めからの支援者の仕事をさらに増やす。当時のことを「一番しんどかったのは外部の人たちに仕事を作らなければいけなかったこと」と言われたという。支援するどころか、初めからの支援者をひどく傷つけるという真逆のことをしていたのである。

この経験を糧に気仙沼地域センター着任後に取り組んだことは、外部に対しては、地域のニーズで求められることは何でもやる・問題を見つけても伝えるタイミング内容などを十分に検討する・受け入れてもらっていることに感謝する・地域に求められていること以外意見しない（これ以上ダメージを与えない）。また内部に対しては、徹底した情報共有、組織を統制し、組織としての意思形成を重視する等、組織機能を回復することとした。

その結果、数年かけて何とか地域の方々から受け入れて頂ける変化が見えた。

片柳氏は業務で心がけてきたことを以下のように

あげている

①すぐ動く（センターから足を運ぶ）②原則、すべて受け入れる ③助言は求められてから行う ④地域の支援者をねぎらうことから始める ⑤支援計画は綿密に打ち合わせを行う ⑥情報は可能な限り詳細まで、タイムリーに共有する ⑦一緒に抱える（相手を責めない）⑧「理想の支援」から「ひとまずやってみる」支援へ

4 子どもとの関わり

気仙沼地域センターでは、大人に関する相談と同様に、子どもに関する相談も積極的に受けており、相談件数は年々増加した。相談の中には、引きこもり、不登校、登校しぶりといった相談も寄せられた。宮城県内の不登校児は震災以前から多い状況があったが、震災後もその傾向は続いていたことが背景に挙げられる。子どもに関する相談の割合は、他のセンターに比べても多いことが気仙沼地域センターの特徴の一つであった。それに伴ってご家族との面談数も増加している。

活動を通じて、学校や地域の人たちがコケセンを含めた精神保健、精神科医療に対し「**がっかり感**」を抱いていると感じた。例えば学校の先生からは、せつなくつないだのに「その後の連絡が全くない。どうなっているのか動きが見えない」「どこがどう何をしてくれているのかわからない」。親からは「やっとの思いで病院に行ったのに様子見てって」「『ご家族はどうお考えですか？』って、それに困っているから相談しているのに何の役にもたたなかった」などの言葉を聞いた。この「がっかり感」をどのようにしたら減らせるか。

どうしたら地域の中に精神保健と連携できるのか、「こんな感じでやっていったらうまくいくのでは？」と伝えられるように好事例をたくさん重ねていくことが大切と考えた。ケースに関りながら本人のみならず家族への支援も行い、学校との連携を行っていった。

最初は学校ともどうやりとりするのかわからなかった、学校もこちらがどう動いてくれるのかわからなかった。ケースの継続的な支援を通じ情報を共有し、お互いの役割分担を継続した。あるケースでは、学校からの連絡を機に支援を開始。生徒の支援は学校が、

医療ニーズのある家族の支援は気仙沼地域センターが担い、医療ニーズの評価と精神的不安定さの軽減を目的に面談を実施した。また学校とは精神保健の見通しの共有化も行った。

その一方で、繋いでいただいても繋ぎきれなかったケースや、問題の解決に至らず変化のないまま時間が過ぎたケースなどもあった。

5 令和7年までの限られた時間で

気仙沼地域センターとしての課題として、令和3年度以降の被災地域の精神保健を見据えた戦略的な取り組みが必要（地域全体の向上を目指した取り組み）と考え、保健所・コケセン・県などと検討し、この地域が目指す方向性として3つの柱を立てた。市町保健師・職員のスキルアップ・地域の専門職の育成・住民のセルフケア力の向上である。

実際片柳氏が毎月1回SSTを中心とした支援技術を習得することを目的とした訪問は、その事業所のグループリーダーを育て、今では事業所の職員によってSSTを運営することができるようになった。また、気仙沼地域センターの職員もSSTについて学習し、今では、その職員が新たに依頼のあった他の事業所でSSTを実施するまでに至った。

令和7年度に向けての動きは、試行錯誤の真つ最中だが、最後まで「外部からの長期の支援を通じて大事なこと」がある。

- 被災地域に受け入れてもらうこと。受け入れてほしいのなら、受け入れることから
- 外部からの支援が地域の支援者を傷つけないこと。外部支援者の「良かれと思って」ほど被災地域を苦しめる。
- 支援を受ける地域に沿う支援に徹すること、支援の内容はそれを受ける地域が決める。を肝に銘じて支援を行っていききたいと話した。

終わりに

被災地における11年に及ぶ困難な実践を、密度濃く凝縮されたエッセンスの形でお話いただいたことは、私たちにとって貴重な学びの機会となった。改めて御礼を申し上げたい。

(YNSN 森川充子)

東京SSTクラブ オンライン公開講座に参加して

～RDI (Relationship Development Intervention) ガイド関係発達支援から学ぶこと～

2022年5月22日(日)に東京SSTクラブでは、白木孝二先生(Nagoya Connect & Share)をお呼びしてRDI(Relationship Development Intervention)の研修会を実施しました。非常に刺激的で目から鱗が落ちる話、とても納得のできる大事な視点で大いに参考になりました。今回はその報告をさせていただきます。

最初に1枚の写真を見せてくださいました。山が見える丘で大人が子どもの肩を抱いて同じ方向を見つめている写真です。子どもへのスタンスを示す象徴的な写真になります。RDIは「大人が子どもに直接教えるのではなく、子どもと一緒に子どもにとっては新しい経験・活動を通して子どもの発達をサポート、ガイドをしていく」というスタンスになるそうです。とても素敵な写真で、関わりをイメージしやすい印象的な写真でした。

RDIはテキサス州ヒューストンのConnections Centerで2000年頃に開発された、家族支援を主にした療育プログラムです。発達障害の特性理解を基にしたながらも、彼/彼女らが社会の中で能力を十分発揮できるよう、豊かな対人関係とコミュニケーション、柔軟な思考と行動の領域での発達促進・支援が目的になります。家族のエンパワーメントを基礎に療育関係の(再)構築と発達過程のやり直しを軸にした家族・療育支援プログラムです。定型発達からずれたところを見極め、つまづいたところからやり直しをします。

自閉症児は1歳になると定型発達との差が目立ってくるようで、大半は定型発達の子どもの1歳前後で経験するところからやり直すこととなります。支援の対象は家族で、家族は支援を受けながら家庭において子どもをガイドし養育・療育する役割と責任を担います。「どうしたら、大きな困難と試練を抱えた(非定型発達の自閉症の)子ども達を(定型児のように)育て発達させられるか」がテーマ。得意な部分を伸ばすだけの支援では対人関係構築のスキルは発達せず、ひとりぼっちであり幸せではない天才になってしまう、段

階的に弱さを克服、底上げさせ、時間をかけてバランスの取れた発達を目指していくという考え方です。

発達のやり直しをしていくので、ある年齢になったから無理矢理学校に行くというよりは、基礎固めができ集団に入っても不安なく他の子とのやりとりの中で吸収できるようになってから集団に入れた方がよいと。確かに無理矢理学校に行ったこと、通い続けたことであつらく厳しい経験をしている発達障害の方々によく出会います。そんな考え方も受け入れられる世の中になるといいなと思いました。

次にガイド関係の話です。沢山のポイントがあり、すべてお伝えすることは難しく、私が印象に残ったものをお伝えしていきます。

- 「苦勞したし、〇〇さんに助けてもらったけれど、私頑張ったらできるようになった」という感覚を持てるようになることが大事。
- 一緒に行動すること、共同作業であること
指示に従わせたり何かを教えたりするのではない。うまくいったかどうかはどうでもよい。一緒に協力してコミュニケーションを取りながらやれたかどうか、ガイド関係で楽しめていれば料理がますぐても構わない。
- 子どもの能力のぎりぎりの線进行评估する
レジリエンス(回復力)が低いので失敗するともうやらないとなってしまう。もう獲得していることだと発達に繋がらない。
- ☺ ガイドが自らの考え、感情、情緒のプロセスを出して表現する。
「こうするとできるかな～」 「う～ん、これ難しいかな～」 などガイドが何を考えているのか言語化していく。
- ☺ 子どもが子どもなりに意思決定(自分で判断して決定・選択)して、行動するようにすること
分かり易い教示は本人達の自分で考える力を奪ってしまうので、曖昧さを残すことも必要。ちょっと頑張らないとできないことにチャレンジするの

で、最初から楽しい訳ではない。子どももガイドも余裕がないとダメ。お互いの気分も大事。

◎ 褒めることよりも、一緒になって喜ぶこと。

どれもこれも素敵な考え方。私が特に驚いたのが、分かりやすい教示について。どう伝えれば分かりやすいかばかり考えていました。そうすることで本人達の考える力を奪っているという考えはありませんでした。気に入ったのが「褒めることよりも一緒になって喜ぶこと」。褒めること、認めることはいつも心がけています。意識はしていなかったけれど喜んでいたりもります。これからは大いに一緒に喜びたいと思いました。RDI を実践するにはライセンスの問題など様々なハードルがあるということでしたが、明日の臨床から生かせる要素満載のワクワクする話でした。

最後に少しだけ東京 SST クラブについて紹介をさせていただきます。2015 年に SST を実践している人を中心に東京都内で定期的に勉強会をしようと発足しました。発足当初は主に渋谷にあるオリンピックセンターの部屋を借りて実施していましたが、コロナ禍になって

からはオンラインで継続しています。内容としては、会員の実践報告、SST に関する最新研究の発表、講師をお招きしての公開講座などです。東京 SST クラブには SST 普及協会認定講師の先生が沢山いらっしゃるののでスーパーバイズを受けることができます。私も何度もアドバイスをもらい元気をもらってきました。公開講座も面白い企画を沢山実施してきました。今回の RDI もそのひとつです。現在は年 3~4 回のペース、オンラインで実施しています。発足当初は東京の方が中心でしたが、最近はオンラインでやっているの全国から集まります。次回は 2022 年 9 月 17 日。近畿支部オンライン SST 主要メンバーの方をお招きして「どなたでも参加できるオンライン SST 体験会」を実施します。是非一緒に勉強しましょう。ご興味のある方は kanamasab@gmail.com へ連絡をください。こちらから詳細をご案内いたします。

(ディープインテンションリンクスマンタルクリニック
金山 正恵)

書籍紹介

絵本「わすれられないおくりもの」 スーザン・バーレイ (評論社)

書籍紹介といっても今回は絵本。約 60 年前に評論社から出版され、現在も再販が続いている。作者は文も絵もスーザン・バーレイ。訳は小川仁央。

夏は帰省や墓参りなどで「死」や「霊」が話題になることも多いかと思う。子どもも 5~6 歳になると、こうした話題に少しずつ参加できるようになる。話の主人公は動物たちなので「死」や「別れ」もややソフトに扱われ、悲しみもワンクッションおいて伝えられている。そして癒やしへと変えられていく。

さて、メンタルネットでは毎月一度(第 2 土曜日)、乳幼児と保護者を対象にして「絵本の会」を開催。この本はやや大人向きだが、取り上げてみたい一冊である。 武井 昭代 (YMSN 会員)



「子どもとみんなの食堂」を試みて

～30人が集って、距離を取り、楽しめる工夫～

昨年度の事業計画にしていた「子ども食堂」でしたが、コロナウイルスの感染予防のため、実現できませんでした。再度今年の事業計画に組み込み、コロナ感染の状況を見て、今回の実施に至りました。

最初は、あくまでもお試しということで開始することにしました。様々な不安や注意点、目標などスタッフ同士で話し合ってからスタートです。

そもそもニーズがあるのか、どのようなニーズなのか、運営する力、継続する力はあるのか、ないのか、必要となった時に継続していくための応援を得られるのか、収支はどうか、目的は何なのだろうか、他の地域の「子ども食堂」は？それでもここではこうしたい、など湧いてくる疑問や不安を整理していき、スタートしました。

■「子ども食堂」の一般的なイメージとここの食堂の個性は

駄菓子屋のお客さんにチラシを渡して呼びかけました。駄菓子屋に来る子どもの保護者に駄菓子屋カフェを知ってもらう目的もありました。大人は「パン教室」に参加してピザとローズマリーパンを作る企画です。子どもがカレーを作って大人にふるまいました。

■運営する力、継続する力はあるのだろうか。必要となった時に継続していくための応援を得られるのか

担当スタッフを決め、ボランティアスタッフとして会員、地域の方に声を掛けました。日頃からカフェを担ってくれる方、港南区社会福祉協議会、地域の方が手を挙げて応援に来てくれました。

カフェ立ち上げの時、よく顔を出してくれたママが駆けつけてくれたのは嬉しかったです。近所の高校生もお手伝いに来てくれました。「誰かのために何かをする」。そういう機会があることが大事なのです。

また、港南区社会福祉協議会が私たちの企画を理解してくれ、フードバンクなどからの品物の寄付や開催時の保険についても準備していただきました。その他の心配ごとについてもアドバイスを頂きながら運営



庭でカレーを食べる子どもたち

できることは、大変心強いです。

■ニーズがあるのか、どのようなニーズなのか

そもそも「子ども食堂」のニーズがあるのかということについては、この地域での社会状況調査などしていないので全くわからないまま出発しました。

最初は駄菓子屋のお客様15組の親子が集まれば・・・と考え、20枚のチラシを用意し配りました。結果、子ども19人とスタッフを含めて大人17人、合計36人になりました(スタッフを除くとちょうど30人です)。2回目の7月は、子ども26人、大人12人、合計38人でした。

子どもがいて、そこに大人がいて、親でない大人に声をかけられる場面がそこにはたくさんありました。ニーズはここ。たくさんの大人に声かけられる場面は子どもの成長にとっても大切なのだと思います。それがこの場にありました。

■横浜市の「子ども食堂」「地域食堂」のガイドブックを参照すると・・・以下の通り

横浜にはいろいろな形態の「子ども食堂・地域食堂」があります。「子ども食堂」や「地域食堂」には、担い手・開催場所・開催頻度などにより、様々な形態があります。「子ども食堂・地域食堂」は、子どもにとって身近なエリアで、継続的に開催されることにより、担い手との信頼関係ができ、子どもや保護者にとって安心できる居場所となります。また、困難を抱える子どもに気づき、見守ることで、地域の中で子どもの育

ちを支えるとともに、必要な時には区役所などの専門機関につなぐことで、子どもを様々な立場の人の目で重層的に支えるネットワークをつくっていくことができます。2020年7月末時点で、横浜市内に約140か所もの「子ども食堂・地域食堂」があることを把握しています。(横浜市社会福祉協議会調査より)

横浜市民意識調査では、地域のつながりが希薄化する一方で、市民の皆さまの地域や社会活動への参加意向は比較的高い状況です。保護者だけでなく、すべての人が未来を創る子どもに目を向け、「子どもにとって」の視点で、彼らの育ちや学びをとらえ、自分にできることはないかを考えることが、地域で子どもを育てることにつながります。

あらためて、横浜市のガイドブックに目を通すと、なるほど…。



水鉄砲づくり



水風船をすくっています

■みんなの居場所事業の一環として運営する「子どもとみんなの食堂」の意味

法人設立趣旨は、「ストレス社会に住む生活者全体を対象にした新しいヒューマンサービスを地域に根ざして展開したいと考えました。そのことが、精神障がいのある人々にとっても、そうでない人々にとっても住みやすい町を築くことにつながっていくと考えます。」そして、定款の法人目的にも「精神障がい者をはじめとした不登校・ひきこもり・介護疲れ・子育ての悩み等の社会的に孤立しやすい人々に対して、精神的に不健康に陥らないために必要なサービスを提供し、誰もが住みやすく、暮らしやすい地域作りを行い、もって社会全体の利益の増進に寄与することを目的とする」。この居場所事業は、この理念を公に見える形

にしていくということになります。誰もが住みやすい地域が、この場所にある。子どもも大人も大勢で作っていくことになります。

■エピソード(ちょっといい話)

- ☺ カレー作りがひと段落して手持無沙汰になっていた子どもたちに、ゲームを提案。ワイワイとやっていると通りかかった近所の大人がずっとその場面を眺めているので、「うるさくてすみません」といったところ「こういう姿が見られるのはいいねえ」と終わるまでニコニコして見ていました。
- ☺ 畑のなすをカレーに入れると、子「なすは苦手です…」／大人「ここの畑で採れたナスだからおいしいよ」／子「わかった～」と完食していました。
- ☺ 1人で参加した3年生の子は、涙をいっぱい流しながら玉ねぎを必死で切っていて、それを見つけた大人がサッと寄り添ってニンジン切りに変わっていました。
- ☺ 切る野菜がなくなってボーっとしている子どもの横で、丁寧に丁寧にたわしでジャガイモをこすっている2人組がいました。
- ☺ 水風船でヨーヨー釣り、夜店だとすくうのをたのしむのだけど、ここでは、作って、ゴムつけて、失敗して、水がかかる体験をして、紐を付けてすくってうました。上の子が小さい子の面倒を見ながらの光景が見られました。

■そして、今後

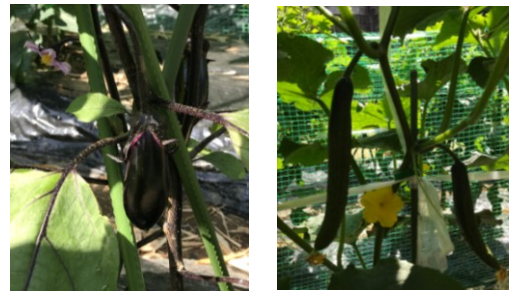
第1回を開催した後、スタッフ間で話し合ったのは、今年度1カ月に1回の開催継続です。8月と1月をお休みし、毎月第2土曜日の15時から18時。メニューはカレー。子どもたちの遊びや親たちの息抜きプログラムも組み込みながら、地域の方たちと作っていく「子どもとみんなの食堂」にしていきます。次回は、9月10日、音楽会を同時に開きます。地域のお父さんたちのバンドが登場する予定です。

大事な収支ですが、1回目は赤字でした。2回目は会員からの大量の豚肉の差し入れなどあり、トントン、その他、毎回「カレー募金」を募っています。2回ともかなりの額の募金が集まり、収支は賄えています。皆さん、ぜひ力を貸してください。どうぞよろしくお願ひします。
(YMSN 鈴木弘美)

駄菓子屋 カフェ

駄菓子屋カフェ”いろどり”も2度目の夏を迎えています。今年も畑にはキュウリやトマト、ナスにピーマンがたくさん実っています。駄菓子屋を買いに来た小学生も畑を見ながら「このキュウリ大きくなってるから採って食べていい？」と、野菜が大きくなるのを楽しみに通ってくる子が増えています。お手製の漬物や

庭になっているキュウリやトマトを嬉しそうに食べている姿を見ていて、畑を担当しているスタッフもとても喜んでいきます。



庭の畑のナスとキュウリ



みんなが書いた願い事↑

今年も七夕にはご近所に頂いた大きな笹を飾り、子どもたちに短冊を書いてもらいました。「夢がかないますように」「やさしくなれますように」「地球温暖化が終わりますように」など様々な願いがありました。「夏休みが増えますように」「みんなのお金が増えますように」など小学生らしい願い事や、「クラスに仲の良い友だちができますように」など、スタッフも一緒に願ってあげたい短冊もありました。普段思っているもなかなか言葉にできないことを書いてくれている子どもたちがたくさんいて、スタッフ一同とても嬉しく感じています。外にいるのが辛い時期ですが、今年もまた扇風機と蚊取り線香を準備しつつ、皆様のお越しをお待ちしています。(YMSN 吉成広美)

ジョブコーチ

最近ジョブコーチ支援に入った方がいます。本人は約10年ぶりに一般企業で就労されることもあり、緊張が非常に強く、熟睡できない日々が続いています。一方の受け入れる企業側は、コロナ禍もあり、外部の者が施設内に入ることができない状況が続いています。

本来なら、一緒に職場内に入らせてもらい、本人の不安を少しでも軽減できるようにサポート出来るのですが、職場内に入ることも出来ないため、作業内容の確認だけでなく、一緒に働く方やどのような環境・雰囲気の中で働いているかわからない状況です。しかし本人の不安が大きいため、緊張が強い出勤前に最寄りのバス停で待ち合わせし、職場までの道のりで体調の確認や不安を感じていることを聞きとり、助言しています。また退勤後や昼休みに職場へ伺い、聞き取りをして疲労度や作業ペースの確認などしています。その他電話での対応や、担当者に職場での様子を伺い、本人の体調や疲労度、職場で感じている不安などお伝えしています。様子や体調の確認はしているものの、具体的なアドバイスや助言などは難しいと感じます。一緒に状況を確認、共有することでよりの確な支援、体調管理の助言が出来ると改めて感じています。しかし、もう暫くは今の状況が続くと思うので、本人が安定して就労出来るように、職場の方にもご協力頂き、職場定着を目指していきたいと思っております。(YMSN 吉成広美)

プレジョブ

今回は、プレジョブの農業ボランティアと調理プログラムを紹介します。

農業は月に2回、シニアボランティアの皆さんと一緒に作業を行っています。

笹下から少し離れた場所で、電車で移動しながら話す時間も楽しいです。3月から6月はじゃがいも

と夏野菜の時期で、作業は、虫取り、枯れ葉摘み、草抜き、土寄せなど。狭い場所で屈みながらの作業で思ったより脚が疲れますが、みんな丁寧にやっています。6月末に新じゃがいもを掘ってきました。宝探しみたい！と言いながら、夢中になっていました。

じゃがいもは翌週の調理プログラムで頂きました。今回はサンドイッチをお好みで作るという企画です。新じゃがいも、笹下の庭で採れたトマト、きゅうり、ナス、近所の方からもらったレタス…新鮮な野菜がたくさん。それにハムや卵を調理して具を用意しました。きゅうりの薄切りにチャレンジしたり、家で覚えた「だし巻き卵」を披露したり、大きいじゃがいもをそのまま挟んだり、それぞれ個性を發揮して楽しい時間になりました。

プレジョブは食べることに関心がないメンバーも多いのですが、2つのプログラム体験で少しずつ変化が感じられています。

(YMSN 山口 奈保)



農業ボランティアでのジャガイモ掘り 作ったサンドイッチ

Irodori

最近は高校生3人が参加してくれています。ふらっと集まって『今日は何する?』から始まって、その日の好きなメニューをいくつか

選んでやっています。

- ★ ゲーム…UNOやジェンガは腕立て伏せや一発芸の罰ゲーム付きで大盛り上がり！！
- ★ 勉強…漢字練習など自分で持ってきた課題をしています。
- ★ おやつ作り…ホットケーキをドキドキしながらひっくり返して、いい焼き加減でおいしくみんなで食べました。
- ★ ものづくり…新しく「いろどり君」のマスコットが完成しました。バザーの商品としてミサンガやマグネットを作っています。絵が上手なデザイナー達が活躍してくれています♪
- ★ 駄菓子屋の店番…接客、計算をバイトの練習として頑張ってくれました。

時間が拡大したことで、Irodoriに合わせて参加するのではなく、参加してくれる1人1人に合わせて使えるようになりました。時々、誰もいない日もあるので、メンバーが増えたらもっと嬉しいです。

(YMSN 渡部恵梨子)



旧↑ 新旧いろどり君 ↑新

ご寄付のお願いと報告

・会費をいただいた方(2022.4.1~7.10)

・神奈川ゆめ社会福祉財団、すぺーす海、久間久恵、渡辺和美、佐藤幸江、宮崎全代、羽鳥乃路、石川到覚、山本香奈芽、山本圭子、鈴木弘美、原悦子、松本まさみ、加瀬昭彦、小松裕史、櫻井廣知、宮タズ、野末浩之、森川充子、中島契恵子、鈴木玲子、大平道子、平井一寛、金山正恵、山口奈央、渡部恵梨子、片柳光昭、武井昭代、前之園佳子、佐倉洋、渡邊英俊、桐原重孝、小山徹平、吉成広美、横田安奈、相原俊介(以上、敬称略)

・寄付をいただいた方(2022.4.1~7.10)

・(税)エクラコンサルティング、平井一寛、金山正恵、谷守、武井昭代、鈴木弘美、佐倉洋、メンタルヘルスデザイン〜こころharbor〜(以上、敬称略)

・ありがとうございます

・寄付をお願いいたします。

・認定NPO法人なので、寄付をいただくと(所得税40%+住民税10%)最大50%の減税になります。今後ともご協力よろしくをお願いいたします。

当事者のためのグループ活動

・就労フォローアップミーティング

・年1回、OB会の開催

・就労者SST

・日程 毎月 第1土曜日 時間 pm. 1:00~2:30 場所 YMSN

・当事者グループ活動

駄菓子屋カフェIrodoriイベント

「本の会」「子どもとみんなの食堂」のご案内

・日程 毎月第2土曜日

・会場 駄菓子屋カフェIrodori デッキスペース

・「本の会」 11時30分~12時 赤ちゃんから5~6歳

・「子どもとみんなの食堂」 15時~18時 どなたでも(事前予約)

正会員：5,000円(個人) 賛助会員：12,000円(団体)

(正会員・賛助会員にはYMSN情報誌を無料配付)

振込先：郵便振替口座 00250-6-71607

横浜メンタルサービスネットワーク

季刊 YMSN情報誌 Vol. 19 No. 1

YMSN 第73号 2022年7月20日発行

年間購読料1,000円(年4回発行) 1冊頒価300円

会費を銀行・コンビニATMやネットから振り込む場合の入力方法をご案内します。

振り込み料は432円かかりますが、郵便局に行かなくても良いので楽は楽です。

(金融機関名) ゆうちょ銀行 (店名) Oニ九

(種別) 当座 (口座番号) 71607

(名義) ヨコハマメンタルサービスネットワーク

発行：NPO法人 横浜メンタルサービスネットワーク

理事長 鈴木弘美 編集代表 森川充子

〒234-0052 横浜市港南区笹下 1-7-6

TEL 045-841-2179

FAX 045-841-2189

<http://forest-1.com/ymsn/>

e-mail: ymsn@forest-1.com